

物議を醸した国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」の開幕から1年がたった。次回開催に向けて名称変更が検討されるなど、企画展「表現の不自由展・その後」

(不自由展)をめぐる騒動は、まだ尾を引いている。ほかの地域の芸術祭や作り手には、どんな影響を与えているのだろうか。関係者を取材した。(宮崎正嗣)

あいちトリエンナーレから1年 表現の場は

騒動の余波 各地に

■「ヨコハマ」開幕

横浜市では先月、国際芸術祭「ヨコハマトリエンナーレ2020」が始まった。約三カ月の会期で「友情」や「ケア」、「毒」といった五つのキーワードを軸に、作品が並ぶ。開催前から、あいちトリエンナーレと並ぶ国内有数の規模の国際展として、昨年の騒動を受けた危機管理や対策にも、注目が集まっていた。

「個人的には、今のところ田村さんは「どんな作品も、何らかの政治性を帯びているはずなので、炎上」する要素はある。ただ燃えやすさに差はあるのではないかと

あいちトリエンナーレの騒動の影響を感じてはいない」と話すのは、名古屋芸術大(愛知県北名古屋市)准教授で横浜に出展する現代美術家の田村友一郎さん(四三)。コロナ禍で報じられた豪華客船などを題材に、映像作品を準備中だ。



横浜市で7月から始まった国際芸術祭「ヨコハマトリエンナーレ2020」の会場風景。横浜西区の横浜美術館で

自主規制の正当化 懸念も

一般的な傾向を指摘。その上で「自分は視点のバランスを心掛けて、緻密に制作を進めたい」と思っている」と話す。示されたテーマについては「そういった意味で不自由展に比べて燃えにくいのが、十分に政治的だ」とみる。

一連の動きについて、昨年「あいちトリエンナーレ」に出展した現代美術家・田中功起さん(四三)は「運営する側が、政治的にきわどい問題を扱うことにより慎重になっている。電凸(執拗な電話攻撃)などへの安全対策が、自主規制や自己検閲を正当化するための理由に使われている」と懸念する。

■「ひろしま」中止

この一年、表現活動の場では、騒動の余波ともいえる事例が全国で相次いだ。

今秋、広島県東部で開催される予定だった国際芸術祭「ひろしまトリエンナーレ2020 in BINGO」は、四月に中止が発表された。新型コロナウイルスの感染拡大を理由としたが、昨秋にあったイベントで、不自由展に出展していた作家の作品が展示されて以降、運営方法をめぐって混乱が起きていた。主催する県が、展示内容を事前に外部委員会で確認するなど、事前検閲とも取れる方針を決定。企画を統括する総合ディレクターが抗議のため辞任し、出展予定だったアーティストら約三十人の不参加も伝えられた。

愛知県の次回(二〇二二年)の開催に向けた準備にも、騒動の影響がつきまとう。県は、行政のトップである知事が、芸術祭の運営主体である実行委員会の会長を兼ねる体制の見直しを進めている。新たに民間から起用して設置する組織委員会の会長候補に、大林組の大林剛郎会長を挙げた。名称も「イメージの刷新を図るため」として変更が検討されている。

■「イメージ刷新」

昨年末、あいちトリエンナーレに参加した作家有志らは、表現の自由を守り育てるために芸術家や主催者の権利と責務などを示した「あいち宣言・プロトコル(議定書)」を県に提出した。だが、受け取った県は、まだこれを採用していない。実際にどのような形で開催されるかは、いまだに不透明だ。